
私が地球を消そうと思った理由

H O G I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が地球を消そうと思った理由

【Nコード】

N0724H

【作者名】

HOGI

【あらすじ】

神のとある決断、神の思惑、神の願い。神は知る、ある物の、暖かさや怖さを。宇宙の調、それは神の呟き。

（前書き）

ジャンルはよくわからないのでとりあえずファンタジーにしました。
思いのほか短くなりました。誤字脱字、日本語の間違いが無ければ
いいですが。

私は神である。

私は今宵、青く輝く星、「地球」を消そうと思う。

私は、この私の宇宙に多数の星を創ってきた。数々の星を見てきた。

地球……それは私が創った数々の星の中でも、珍しい状態へと変化した星だ。

この星と似たような環境の星も、この宇宙には多数ある。それらの星で起きた事象はどれも似ている。

一つの星に様々な生命が誕生し、進化をしていく。生命の種達はその星に適応していく。

原始の海を初めとした生命の種達はほとんど、星を出るところか海を出るのがやっとであった。進化をとげ、高いレベルの知恵をつけた生命体、知的生命体は海の中で文明を築き、その知恵をもって誕生させた物で、海を出た。それが限界であった。

しかし、地球は違った。地球の生命の種達は、身体の変化を得て、身体的な力のみで大地へ出たのだ。大地を出て空へとたどり着いた種もいる。そして海に残る種も。

文明……知的生命体が必ずと言っていいほど築き上げる物である。私は様々な文明を見てきた。

一つの星にいくつかの文明がたつ事はある。

だが、地球には誕生した文明が多かった。これだけの文明が誕生した星は初めてであった。その分、滅ぶ文明も多かった。

文明は、文明を吸収した。そのためだろう、文明のレベルは比較的早く上がって行った。

今、地球で主になっている文明は一つ。今まで見てきた文明で、

他に類のない文明となっている。

驚いたのは、自らの手で命を絶つ者が出たということだ。本能に従い命を絶つ種はいる。地球にもいるが、子を育てるために自らを餌にする種だ。こういったケースは他の星でも見られた。しかし、地球の文明上では、私が生命に与える物の一つ、「生きる意志」、それを失う種が出るのだ。

私はそれに興味を持ち、長い間思考した。地球の文明に生きる種の深層心理を見た。それを見て私は思い出した。

生命は絶対的な恐怖にかられると、逃げる手段として死を選ぶのだ。それは絶望という物だろう。

その絶望を私は、地球の文明で生きる種から感じたのだ。

知的生命体が築き上げた文明の中で、絶望がここまで蔓延したのを見たのは初めてだ。

文明社会自体を調べたところ、その種の文明社会で成功したと言える者がいるほど、失敗したと言える者が出ている。文明に置き去りにされる者が出ている。

知的生命体といっても、そのほとんどは群れを成して存続し続ける種である。群れを成す種の共通点の一つは、群れから離れると生きてはいけない。知的生命体と言えどもそれは同じ、自身の種の文明に置き去りにされては生きていけないのだ。

しかし、私が見てきた他のどの文明を見ても、文明から置き去りにされる者が出るなどという事は起きた事がない。地球の文明社会の上で生きている者にとって、文明のそれは大きな欠点となっているだろう。

もう一つ、地球の文明社会の上で種が絶望を感じている場合がある。それは私にはよくわからない物であった。種はそれを激しく恐れている。激しく好む物もいるが、異常なまでに不安定な物を感じる。

この類の絶望はなんだ？ 私にはわからない。

地球にしかない、一番私を感動させた物がある。青い星、地球が私に教えてくれた物だ。

それは、凍てついた私の心にも暖かさを感じさせた物だ。

それは、私には上手く説明することが出来ない。様々な生命達を感じる歓喜、心地良さなどに近い物を感じさせる。

しかし、それは常に、今まで私が見てきた物には類のないほど激しい憎悪や嫌悪などを隣り合わせに持っている。

それは地球上に蔓延している。

それは私と言う存在を大きく変えた物なのは確かだ。私はそれを知ることで、それを持つことが出来たのかもしれない。

それは……いや、もういいだろう。

この宇宙で誕生した知的生命体と呼べる種は全て、同種の間で激しい争いを起こしてきた。それだけならいい。

知的生命体は、他の知的生命体と出会い、一時的な和解はするも、後に必ず争いを起こす。私は、この宇宙で誕生した文明に干渉はしたくはない。しかし、この宇宙が荒らされる事だけは許さない。私は、文明と文明が星々の間で触れ合った時、それらを消してきたもつとも、私が地球のあれを知ってから激しい後悔を覚えたことだ。

地球の主な文明を築いた種もまた、星を出るだろう。

地球も同じく争いをするであろう。地球だけにしかないあれには期待した時もあった。しかしそれはあまりにも大きな賭けだ。失敗した際には文明を二つ以上消すことになるであろう。私はそのリスクを恐れた。

長い間思考した。その種は今にも星を出ようとしていた。時間は

なかった。

その種は星を出た。予想はできる。この先は短い。その種は自身の知恵でこの宇宙を効率的に移動する手段を得るだろう。その種はの自らの文明とは違う、別の星の文明と出会っだろう。そうなくてはもう遅い。

そう・・・時間はなかった。

私は決断したのだ。

神は、震えた長いため息を漏らす。

「もし、お前達が私に愛を教えなければ、お前達は私の好奇心故に助かったかもしれない。しかし、私はこの宇宙、この宇宙にある数々の文明を守らねばならない。……守りたいのだ。……これはお前達が教えてくれた愛、か……それとも憎悪か……。」

神は一粒の涙をこぼす。

「さらばだ、青き星よ……愛を持つ星よ……。いずれ、愛を持ち、争いの無い星が誕生することを私は願う。……さらばだ。」

今宵、宇宙の片隅で、一粒の星が消える。

神がこぼした一粒の涙は、この宇宙のどこかで一粒の星となるだろう。

（後書き）

3 部作にしようと思いましたがやめました。
そしたら思いのほか短くなりました。 お暇でしたら評価をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724h/>

私が地球を消そうと思った理由

2011年1月6日14時29分発行